

会報

## 安曇人

安曇誕生の系譜を探る会

CONTENTS

- 1 新年度に向かって……………会長 金井 恂
- 2 部会活動報告……………安曇野歴史部会・安曇氏族部会・安曇ゆかりの地部会
- 3 にわか案内人のデビュー……………千国 寛一
- 4 掘り出された石は……………池上 勝三  
東西文化「縄文人」と「弥生人」の分岐はどこに?……………有賀 裕司
- 5 第7回金印シンポジウム in 志賀島 参加報告……………丸山 祐之
- 6 改めて弥生時代の安曇を考えると……………百瀬 新治
- 8 龍伝説—川會神社バージョン……………氏族部会 平林 厚美
- 11 誌上ギャラリー……………撮影 小松 宏彰
- 12 編集後記 歴史を正しく理解するということ……………編集委員長 本郷 敏行

発行:安曇誕生の系譜を探る会 発行責任者:金井 恂 編集委員長:本郷 敏行 事務局長:浅川隆 〒399-8304 長野県安曇野市穂高柏原3612-3



## 新年度に向かって

会長 金井 恂

私たちの会は発足してからすでに満六年経過し、今年  
は七年目に入ります。振り返って見ると、いろいろとあり  
ましたが、活発に活動してきたと思います。勉強会活  
動は分科会方式で、テーマごとに同好の会員たちが集ま  
り、日常的に活動しています。テーマが古代史のジャン  
ルであり、史料不足やいろいろな見方・考え方がありま  
すから簡単に結論の出るようなものではありません。し  
かし同好の志が集まって、日常のさまざまな煩わしさか  
ら離れて郷土の古代史についてワイワイガヤガヤするこ  
とは楽しいことであり、気持ちの若返りにつながります。  
私たちは市民サークルとして、また門前の小僧として郷  
土史を楽しもうと考えて活動していますから、学術研究  
の次元とは異なっていて良いと考えます。自分たちが楽  
しめるような活動をするのが目標です。そういう観点  
で見るとまずまずの活動内容だったと思います。しかし  
反省すべき点の一つがあります。会員数は現在約120名と  
多いのですが、勉強会、講演会、現地見学会に参加する

会員が少ないことです。多くの会員が参加するように運  
営しなければならないと考えます。そのためには、いま  
会ではどのような活動をしているのかということをも  
全員にどしどし情報発信していくことが必要と考え  
ます。そして会員みんなが楽しめるような魅力ある  
会にしていきたいと考えます。

また会では安曇氏族ゆかりの地との交流活動も続  
けています。25年度では全国交流会を休みましたが、今年  
は滋賀県高島市安曇川町で開催する方向で進んで  
います。全国のゆかりの地との交流は、それぞれの地域の人  
たちと古代史を語る楽しい場であり、また地域ぐるみでの交  
流・宣伝の場でもあります。今年もぜひ多くの方々  
に参加して頂き、楽しい交流会にしたいと思っています。

昨年は安曇野市教育委員会、豊科郷土史博物館をは  
じめ長野県立歴史館や埋蔵文化財センター等のご協力を頂  
きました。今年もさらに協力関係を密にして進めてい  
きたいと考えています。

## 安曇野の歴史部会

## 歴史部会便り

部会長 金井 透

部会の会員は現在26名で、月1回を目途に勉強会を実施しています。今までに学習してきたおもなことは、安曇平に残された先人たちの足跡を安曇平を4つの地域に分けて(豊科、三郷、堀金)、(穂高)、(明科)、(大町、池田、松川)、机上学習を、発掘を担当された諸先生をお願いをして勉強をしてきました。安曇野市旧町村の遺跡・古墳の分布を地図にプロットしたり、安曇平の古代年表づくりなどをしてきました。

縄文の時代の人たちの狩猟採集経済の生活が行詰る中で、水稲栽培経済を中心とする文化を持った、弥生人がやってきて生活を始めた。縄文系の人々と弥生人(渡来人)たちとの共同生活で混血が進み、安曇野に定着して「安曇人」となり安曇野の開拓を手掛けてきた。この足跡を稲作の歴史から追いつめてきました。その過程でこれからの学習のポイントをあぶりだし整理して、さらに学習していきたいと考えています。

- 稲作文化を持ってきたのは、「弥生人」とすると安曇野へは、どのようにやってきたのか、なぜ安曇野を選んだのか。
- 渡来系の人々はどこから。どんな人たちが？(安曇野では大町地区借馬の積石塚古墳あり)

- 大和王権との関わりは(安曇比羅夫像穂高神社にあり、安曇建郡と安曇氏(部)関係)
- 遺跡・古墳、土師器等からみえる、安曇平における稲作について。
- 明科廃寺遺跡をつくったひとたちは？安曇族(部)か、蘇我氏との関わりは？
- 稲作道具(稲作と鉄、稲作と馬の役割、馬の生産(牧飼育は)から。
- 水灌漑設備、堰(横堰)川(縦堰)から、コメの貯蔵建物、入れ物(甕)。
- 松本市の弘法山古墳の田川周辺並柳での稲作、奈良井川右岸の稲作が安曇野に影響さなかったのはなぜか、暴れ川、梓川に阻まれたか？

これからの、歴史部会の学習課題は一杯あります。一緒に勉強しましょう。また3月2日の発表会では浅川さんによる「米について何がわかったか」と題して伊藤俊幸氏の研究を紹介します。「植物名を稲、実を粳、穀を取れば米、炊けば飯…、収穫した後の茎は藁…」米食民族ならではのよびわけがある。そんなコメのお話を期待してください。大勢の会員皆さんの参加をお願いします。

## 安曇氏族部会

## 平成25年度安曇氏族部会活動報告

部会長 古川 幸男

今年度は、今迄の基礎学習に加え、「安曇族の定義」について討論してきました。

以下の3点を重視して進めています。

- ①そもそも「安曇族」って何なのか？
- ②どの範囲までを「安曇族」と言うのか？
- ③何ををもって「安曇族」とするのか？

大変に難しいテーマで議論の内容も広範かつ多岐に渡ります。証拠や資料もとぼしいのです。

現在、まだまだ進行中ですが、今迄キチンと定義付けもされずイメージの中だけで語られてきた、いわゆる「安曇族」という言葉の定義づけを我々なりに明確にしたいと考えています。

## 安曇ゆかりの地部会

## ゆかりの地部会活動報告

部会長 金井 恂

安曇氏族ゆかりの地部会では、全国にあるゆかりの地を探ることを目指して調査しています。そして連絡の取れたゆかりの地と連携して安曇氏族に関わる歴史情報を発掘することを目指しています。そうすることによって、安曇氏族がいつの時代に、どこを通過して信濃国安曇平へやって来たのかということが浮かび上がってくると考えています。

全国に約830社の綿津見神社があります。福岡市の志賀島神社に綿津見神社リストが所蔵されており、それを穂高神社の宮司さんをお願いして入手しました。そのリストに基づく数値です。このリストには綿津見命を祀る神社として、若干の漏れがありますが、ほぼ網羅していると考えられます。そこで昨年からのリストに基づいてひとつずつ綿津見神社の由来と安曇氏族との関わり

の有無について調査してきました。その結果東日本の神社、166社についての調査を終えました。

それによると、東日本における安曇氏族の痕跡は長野県安曇野市・長野市、神奈川県湯河原町が安曇氏族ゆかりの地と言えることが分かりました。そして岐阜県岐阜市、石川県志賀町、静岡県浜松市は今回調査では確定できなかったのですが、強い痕跡があることが分かりました。安曇氏族が日本海側からやってきたとする説がありますが、すると新潟・富山地域には安曇氏族の痕跡があるべきと考えられます。しかし今回の綿津見神社の調査からは安曇氏族の痕跡を見出すことはできませんでした。

調査の対象とした神社は、穂高神社のように繁栄しているところがある一方で宮司が常駐している神社は少数であり、さらに鳥居と祠だけが寂れてひっそりと建って

いるところが多数でした。宮司から神社の由来や安曇氏族の話を知ることができたのはわずかなケースでしたが、それらの話から察すると、神社は長い歴史の中でさまざまな苦勞をしており、祭神の変遷も多々あったようです。中には神社の名称が変わったというところもありました。日本における神は、ある面では非常に人間的であり、氏族や地域に密着して、長い歴史を潜り抜けてきているように感じました。

調査では神社年鑑、インターネット情報を基本として、安曇氏族と関連ありそうな神社については現地を訪ねて確認したり、宮司に電話して話を聞いたり、あるいは手紙を書いて問い合わせたり等の方法をとりました。先に述べましたように、神社自体が寂れてしまっているところ

が多いこともあり、得られた情報は十分とは言えません。しかし安曇氏族との関連を推測するには足りる内容と考えています。

今回調査は岐阜県・福井県から東日本についてのものであり、愛知県・滋賀県から西日本については今後の課題です。西日本地域については安曇氏族との関わりが深い地域が多いこともあり、地元の人たちとの協力を得ながら進めようと考えています。

3月の発表会ではこの調査結果についての要旨を報告することにしています。当日は発表時間が短いため要点のみとなりますが、ご希望の方は申し出いただければ、詳細を提供します。

## にわか案内人のデビュー

会員 千國 寛一

平成25年10月12日に国営アルプスあづみの公園において「第8回安曇野フェスタ」が開催されました。

当日はイベントの一つとして、「ミステリー&ネイチャー・ウォッチングツアー」と称して、安曇野に流れ出る烏川からの取水口を見学する計画がされており、その案内役のお手伝いを我々「安曇誕生の系譜を探る会」にして欲しいとの依頼がありました。

早速、9月22日会員6名が集まり、浅川事務局長が講師となり「にわか案内人」の研修会が現地で行われました。

私も案内人は務まらないと思いながらも、イベントには興味がありましたので研修会には参加しました。ところが、研修会に出たために案内人を務めなければならない羽目となってしまいました。

当日は県内外から集まった来場者を1組30名程度にして2組に分け、案内人が夫々の組に3名がつけました。

午前10時から午後3時までに延べ6組の参加者があり、私も2回案内をいたしました。3kmの行程を1時間30分かけて勉強の成果を発表しました。

私はこの公園には今までに数回訪れていますが、今回の取水口のことは始めて知りました。説明の出来不出来はあったものの、良い経験をしたと思っております。

ここに当日案内した一部分をご紹介します。

1 出発前に、ここ安曇野の大地は扇状地といって、烏川によって北アルプスから運ばれた石や砂が積み重なってできているため、降った雨はすぐに地下へしみ込んでしまいます。このため、生活や農業に使用する水を確保することは大変むずかしい問題でした。この地で縄文時代の土器が発見されており、今から8000年ほど前に先人がおり、また、弥生時代には稲作が始まったことが確認されております。江戸時代以降に沢山の用水路が縦・横に網の目のように引かれ、大地を潤し、現在は恵み豊かな田園地帯となっています。本日はこ

の安曇野に流れ出る烏川からの取水口をご案内します。それでは出発します。

### 2 払いマチ

ここでは、水路が立体交差をしています。石組みの水路を流れる上の水とその下を通り抜ける水路です。下を通るのは烏川の上流で取水された矢原沢という水路です。そして、矢原沢の取水口よりさらに上流では別の地区のための上川という水路が引かれていました。

上川の水量が増えた時、増えた水を烏川に戻すために放水路として設けられたのが、上の石組みの水路だったのです。この放水路を「払いマチ」と呼びました。

### 3 三つどよ（水の分かれ道）

川から水を取り、集落へ分ける、さらに田んぼに分ける。この構造物は水路の水を分ける分水跡です。安曇野の水の歴史は争いの歴史とも言われるくらいでした。灌漑(耕作)面積に応じて右から松下堰、中沢堰、矢原沢の三つに分水しました。三つどよは水争いを防ぐために造られたものです。水は人々の命にかかわる大切なものでした。そのため、知恵を出し合い、苦勞を重ねて水は分けられてきました。水を分かちあう、今世界で最も重要なテーマです。先人の知恵に学びたいと思います。

4 他に「五ヶ堰取水口跡・見張り台」「倉田堰」「人面岩」「須砂度神社」「二つ塚古墳」を案内し、最後に第18回全国「みどりの愛護」のつどいで皇太子同妃両殿下が植樹された桜の木と記念の道祖神を見学して解散しました。堰には先人の知恵と多くの苦勞の物語りがあることを知りました。案内で心配したことは、あのきれいな花の名は、今鳴いている鳥は何て鳥と聞かれても全く答えることは不可能でしたが、幸いにもウォーキングコースには時期的に花はなく、鳥もいなく、にわか案内人に見方してくれたものと感謝しながらほっとして帰途につきました。

# 掘り出された石は

会員 池上 勝三

今から七年前に雨水を利用しようと思ひ物置の隣に貯水槽を作ることにした。

長峰山(932m)から流れ下る扇状地“尻無沢”で普段水は流れていないが梅雨時や秋の長雨の時期、以前はゴウゴウと云う音を立てて濁流が流れ下る。今はコンクリートで治山治水事業がなされ幅2メートル深さ2メートルの溝ができていて、その脇に家がある。

自分自身の身長、1.7m位掘り起こすことになり工事が始まった。そこから厚さ15cm長さ30cm位の台形をした砂岩が掘り出された。両側は平ら石で片側に三文字「池上氏」と掘られていた。この石は何の目的…、興味は募る。

それとは雲泥の差のある、天明4年(1784)2月23日志賀島の志賀島村百姓甚兵衛が叶(かな)の崎の水田から金印を発見したというその経緯を記した報告書が天明4年志賀島村甚兵衛金印掘出候口上書として福岡藩に提出さ

れた。それを大谷光男先生が以下のように現代風にわかりやすく書き直している。すなわち、「私が自分の持っている叶の崎というところにある水田の水の流れが悪いので溝を修理しようと岸を切り落としていましたところ、小さな石の段々が出てきて、そこに二人で持ち上げなければならないほどの大きな石がありそれをかな手子(てこ)で掘り起こすと石の間に光るものがありました。これを取り上げて水ですすいで見たところ金の判のようなもので、よくわからないので持って帰って、兄の喜兵衛に頼んで以前奉公していた福岡の商家に持っていき(そこから有名な学者の先生に)鑑定してもらったところ、すぐお役所へ届けるように申されましたのでお届けします。どうぞよろしくお願ひします。」

なお、金印の出土地も謎の一つである。

# 東西文化「縄文人」と「弥生人」の分岐はどこに？

会員 有賀 裕司

冬の料理と云えば、なんと言っても「なべもの」である。湯気のたつなべから、ぐつぐつ煮たった魚や野菜をとって食べる。からだ温まっていい気分になる。全国各地に、郷土名物のなべ料理がある。たらちりはわるくないし、かきなべは美味しい。こういった「なべもの」大好きな人は、ハヤリ言葉でいえば「縄文人」である。

「縄文人」の食生活は、食べ物の好みに名残りをとどめている。なべものや、刺身などの生ものが大好きなことだ。「縄文人」は採取文化である。東日本ではサケやマスが川を上ってくるから、それを獲って食べる。どんぐりや木の実を粉にして団子にして食べる。縄文土器ができてからは、そのなかに魚や団子を入れて煮込んでいたとみられている。「なべもの」の元祖なのだ。なべものや煮込み、さらに刺身のように自然に近い生ものが大好きなあなたは、純度の高い「縄文人」である。

一方、「弥生人」は農耕文化。食生活は米、あわ、ひえなどの穀物中心に変わる。銀シャリ大好きは「弥生人」だ。朝ごはんを食べてこないと一日元気がでないというあなた、どんなに遅く帰ってもお茶漬けサラサラでかき込まないと食った気がしないというあなたは、まぎれもない

「弥生人」である。なにごと折衷主義のお国柄ゆえ、「縄文人」と「弥生人」双方の好みを取り入れた食べものがある。それは、日本人が好物の「にぎりずし」である。

東西文化の境界線は我が安曇野に近い隣県にあるのだ。

## 東西文化の違い

中央の境界線  
東西の接点 国道41号線  
至る富山県

東	西
縄文・採取文化	弥生・農耕文化
江戸間・広い	京間・狭い
濃い味	うす味
囲炉裏(いろり)・焼く	釜 処(かまど)・煮る
背負子(しよこ)	天秤棒(てんびんぼう)
角餅(かくもち)	丸餅(まるもち)
蒸し焼き(むしやき)	直火焼き(ちよつかやき)
鮭(さけ)	鱒(ぶり)
?	五右衛門風呂(ごえもん風呂)
馬鹿(ばか)	阿呆(あほう)
落葉樹・木の実が落ちること(胡桃等)	常緑樹・一年中落葉しない(松・杉など)
一差し指(ひとさしゆび)	江差し指(えさしゆび) 業指
森のめぐみ・木の実を粉にして食べる	米づくり・米・あわ・ひえなど穀物類を中心
同族的つきあい・寒い りんご	村的つきあい・暖かい みかん
縄文人	弥生人

至る愛知県  
国道41号線  
愛知県蒲郡



縄文人(南方系モンゴロイド) 弥生人(北方系モンゴロイド)

別冊宝島 完全図解日本の古代史より

# 第7回金印シンポジウム in 志賀島参加報告

会員 丸山 祐之

昨年10月19日(土)志賀島歴史研究会の主催した第7回金印シンポジウムに参加してきましたので概要を報告します。

## ◆全体テーマ

「志賀島と奴国」－ 金印の謎と阿曇族の足跡 －

## ◆内 容

- (1) 記念講演：金印の謎を追って 60 年  
二松学舎大学名誉教授 大谷光男氏
- (2) 特別報告：知られざる金印『平阿侯印』の検証  
所有者 佐野豊進氏
- (3) 奴国の王都・須玖遺跡群発見 113 年  
奴国の丘歴史資料館 井上義也氏
- (4) 阿曇族と太宰府天満宮 禰宜 味酒安則氏
- (5) 志賀島再発見・古代「猿投焼」見つかる

NPO志賀島歴史研究会 岡本顕実氏

上記(1)～(5)ともそれぞれ興味深い講演、報告でしたが、今回は特に(2)の「特別報告『平阿侯印』の検証について」をとり上げておきます。

天明四年(1784年)に志賀島から出土した国宝・金印は「紀元57年に奴国王が後漢の光武帝から下賜されたもの」というのが定説となっていますが、いまだに一部では贋物説がくすぶっているのはご承知のとおりです。

今回の佐野氏の報告は、国宝金印との比較考証をし、氏所有の『平阿侯印』が本物である根拠に関する内容でしたが、逆に国宝金印の本物説を補完させるものとなったと思います。

当日は、平阿侯印の宝物を立派なケースに入れ、ガードマン付で会場に持ち込んで展示してありました。

## 〔報告内容〕

平阿侯印：前漢末に漢帝国(中央政府)より下賜された内臣(平阿侯)の公印(佐野氏説)

## ◆検証のポイント

- ①平阿の場所。平阿侯国は存在し、平阿侯は実在したのか。
- ②平阿侯は金印を持っていたのか(持てたのか)
- ③金印製作上の着目点
  - 鈕(印の上にあるつまみ)国宝金印は蛇、平阿侯印は亀
  - 布字法(印を刻するため印面に文字を入れること。)
  - 刻法(印の刻しかたで、鑄法と鑿法がある)
  - 封泥(古代中国で用いられた封緘の一種。秦・漢時代に盛んに行われた。)
- ④国宝金印と平阿侯印の科学的分析比較  
金、銀、銅その他成分の分析値。両者とも各値が似通っている。特に金の純度が95～96%であり、漢代に99.99%の純金は考えられず、本物説の根拠ともなる。

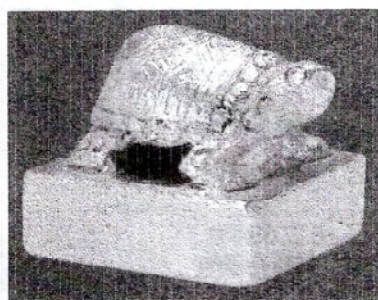
## ◆国宝金印について

天明四年(1784年)に発掘された時点で、金印の本来の使用法(封泥)は中国でも日本でも知らなかった。この印は見事な封泥を作り出す刻をしている。天明当時、日本の漢印の研究は古銅印譜等により印面の印影より情報を得ているだけだった。良い封泥を作るためには、印面の印影より印面の線の内側が重要なのである。封泥によって用いられる事も知らずに、この印を刻するのは到底無理である。したがって国宝金印は漢代の工人が刻したものである。

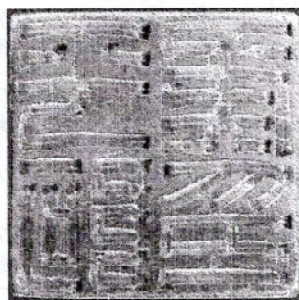
以上が佐野氏の報告の概要ですが、詳しく知りたい方は、レジュメがありますので事務局へ連絡して下さい。また、レジュメには先述の(1)～(5)の詳細もあります。

金印「平阿侯印」 制作：前漢末(紀元前27年)

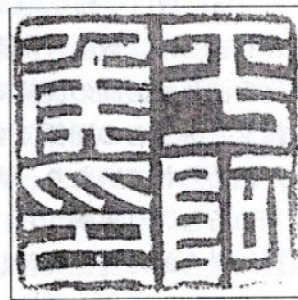
第7回金印シンポジウムin志賀島レジュメより



金印亀鈕 重さ 130.73g



印面 辺長2.35cmの正方形

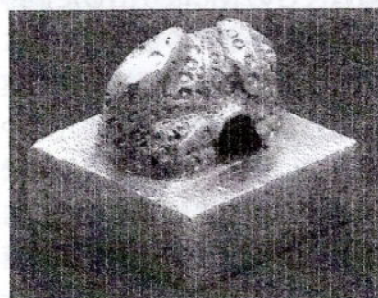


印影 「平阿侯印」の4文字

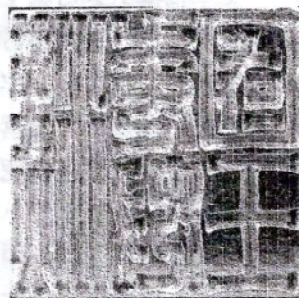


「平阿侯印」の封泥

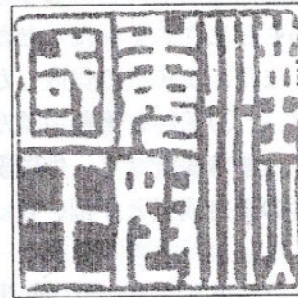
金印「漢委奴国王(国宝)」 制作：後漢初め(紀元57年)



金印蛇鈕 重さ 108.73g



印面 辺長2.35cmの正方形



印影 「漢委奴国王」の5文字



「漢委奴国王」の封泥(参考)

# 改めて弥生時代の安曇を考えると

会員 百瀬 新治

## はじめに

昨年末12月7日の講演会『北村遺跡とその時代』に参加し平林彰氏の中野市柳沢遺跡を例にした話をお聞きする中で、もう一度安曇の弥生時代を見直さねばと感じました。近年の長野県内における弥生時代の調査研究はこれまでの日本列島における古代の歴史観を覆すほどの状況にあります。県内における新しい発掘調査の成果に基づく研究をまとめ弥生時代の安曇を整理して、安曇誕生や安曇族を見返したいと考えています。

## 昭和を駆け抜けるように大きく進展した弥生の研究

戦後の日本歴史研究特に古代史は、新しい科学的な調査によって解明する方向で出発し、静岡県登呂遺跡はその象徴的な発掘調査として全国的な注目を招きました。発掘調査の結果を研究の対象とし論拠とする考古学研究成果は、稲作を営み金属器などを使用する大陸渡来の弥生文化の姿として、邪馬台国や卑弥呼に関係する内容と結び発掘調査研究で具体化しつつあります。

弥生時代とその文化が次第に明らかになる中で、北九州や畿内を中心とする西日本に比べ、信濃を含む東日本は遅れて成立し内容もやや貧弱というイメージが定着してくるのです。特に、権威や財力のシンボルと考えられる青銅器(銅鐸や銅剣)は発見出土が西日本に集中し、弥生社会の文化波及やクニなど権力構造を裏付けているとされてきました。

考古学的調査資料をもとにして弥生の研究は大きく進展していますが、最新の調査成果から私が重要と考えるいくつかに絞ります。まず、弥生時代の開始時期ですが、その母体となった中国や朝鮮の歴史との整合性などから約2500年前が定説だったものが、一気に数百年遡り3000年近く前が開始時期との説が示されました。放射性炭素の分析結果等からですが、新文化の波及や展開の経緯に再検討を迫るものです。次は、縄文と弥生との関係です。弥生時代前期の甕棺に縄文人骨が納められていたり、両方の集落が近くで同時に営まれているという事例から、両文化は征服等の状況になく漸進的融合的に変化交替したと再考されています。最後は稲作の技術です。沼地に直播するような粗放的な稲作を想定する考え方が、土木工事を伴う水路を築き水平な田面に田植えと行なうなど、最初から高度な栽培技術のもとにされていたことが発掘から裏付けられています。また、実年代の見直しから、奈良盆地における纏向(まきむく)遺跡と箸墓古墳が邪馬台国と卑弥呼の墓を強く想定する研究など、倭国誕生時期の中国側文献と考古学等の調査成果とが補い合っ

## 近年の大規模調査と新発見で変わる信濃の弥生

昭和から平成に改まる頃から、県内では高速道路・新

幹線・長野オリンピックと大きな開発事業が続きました。長野県埋蔵文化財センターや県下各市町村教委では、それに伴う遺跡の発掘調査を大規模に実施しています。発掘調査報告書の記録を中心に、その中から『赤い土器のクニ』と呼ばれる北信から中信までの範囲における主要遺跡を一覧表にまとめてみました。このクニの範囲に位置付く弥生集落を概括し、大きく変わりつつある信濃の弥生時代を少し明らかにしてみます。

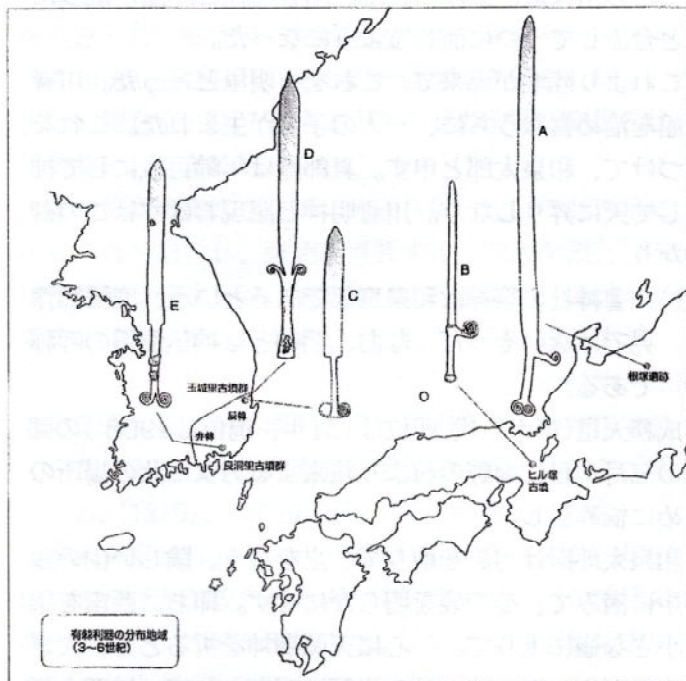
遺跡名・所在場所	遺跡の概要 遺構と遺物数
松原・長野市	環濠集落 竪穴住居 240 平地住居 312 高床建物 74 木棺墓 16
篠ノ井・長野市	墓域 竪穴住居 164 高床建物 29 円形周溝墓 55 小型銅鏡、銅釧
川田条里・長野市	水田(弥生時代中期から古墳時代以後含む) 200 面以上
榎田・長野市	石斧生産集落 竪穴住居 128 木製農具他木製品多数
屋代・千曲市	縄文から現代まで集落域継続 竪穴住居 67 以上
周防畑(遺跡群)・佐久市	竪穴住居 125 以上 銅釧、玉類(大型ヒスイ製・ガラス等)
西近津・佐久市	竪穴住居(大型住居含)600以上 高床建物 80 以上 銅剣、銅釧
柳沢・中野市	祭祀(青銅器埋納)銅鐸 5、銅剣 8 礎床木棺墓17シカ絵土器
小泉・飯山市	竪穴住居53 高床建物129 木棺墓等153 流水文木器、玉類
根塚・木島平村	円形墳丘墓他 渦巻文装飾付鉄剣、 刻文字?土器
百瀬・松本市	環濠集落 竪穴住居18以上 磨製石器類
県町・松本市	竪穴住居 43 以上 礎床木棺墓 3 磨製石器類
中城原 古城・大町市	竪穴住居 45 以上 周溝墓?9 木棺墓 4 玉類 鉄器類
黒沢川右岸・安曇野市	竪穴住居 2 磨製石剣?
町田・安曇野市	竪穴住居 10 高床建物 3 人面土器、磨製石器類
三枚橋・安曇野市	竪穴住居 11

まず指摘できる第1の点は、この表に取り出した遺跡以外を含め、佐久から飯山・木島平までの千曲川沿岸に大遺跡が並ぶように存在することです。大規模遺跡の実態である拠点的な集落は、これまでの調査等で北九州や畿内・東海に濃密に認められています。現在は部分的な調査が多いのですが、遺跡全体が把握されると何百軒もの住居が構築され、中には周りを深い溝で囲う環濠集落も存在しているのです。さらに、周囲に比べ大規模な住居や並ぶ高床倉庫群そして方形・円形の周溝墓群等、権

力や財力の集中を裏付ける集落の実際が明らかになっています。一方、遺跡集落の持続時期は思いの外短期間で消滅あるいは移動する例も多く、大集落であっても不安定な状況がみえています。

第2に、集落の経営基盤となる生産手段(水田・畑)と道具(石器・木器・金属器)についてまとめます。農業の場となる水田や畑については、長野市川田条里遺跡等で良好に確認できました。従来想定されていたように、自然堤防に囲まれた広範囲の低地は水田域だと実証的に判明しました。小規模ながら規格的な田面や用水や畦畔の築造方法から、近年明らかになった高度な稲作技術が確認できます。稲作の道具は現代に近い農具として完成していた点も多数の出土木器から明らかになりました。

3番目として、柳沢遺跡で注目を浴びた金属器と集落の関係に触れます。長野県内における銅器・鉄器の出土は、東国の中では特段に多かったのですが、その延長線上に柳沢遺跡の発見があり、他の遺跡でも続々と続いています。特に、木島平村根塚遺跡の墳丘墓出土鉄剣は、朝鮮半島南部と直接つながる資料です。柳沢遺跡の発見により、畿内及び北九州と千曲川の集落との交流が想定されていますが、その先朝鮮半島の渡来系文化との交流も見通せるのです。



根塚遺跡出土鉄剣の分布

### ■考古学的立場で安曇の弥生にもう一度触れると

ここで安曇野の弥生時代遺跡(集落)を、先述した千曲川流域で示した3点との比較で見直してみます。

1番目の集落規模ですが、数百軒の家が環濠の内などに築かれる千曲川に対し、安曇野は大町市農具川沿いの集落(古城集落等)を除いて、格段に小さく拠点とは想定し難い集落となります。とりわけ、旧南安曇郡内では矢原遺跡群が今後の可能性を残しますが、周溝墓の未発見を含め拠点と想定できる内容は認められません。大町と

千曲川のような大集落が密集する状況ではなく、隣接する松本でも規模内容とも千曲川に及びません。

第2に、集落存立の基礎となる生産手段ですが、千曲川沿いのような広大な低湿地は見当たらず水田址も確認されていません。畑作を想定すると、南信下伊那の段丘上に畑作に依拠する集落群がありますが、安曇野では使う道具(石器)に違いが認められます。現段階では権力や財力を集中保持させる基盤は想定できないのです。

3番としての金属器等の保持ですが、大町農具川沿いの遺跡からは複数出土し、小谷村出土と伝えられている銅剣があります。また、松本・塩尻では銅鐸等の出土もあり、その持ち主や集団(集落)もそれなりの位置にあったと考えられましょう。しかし、先述したようにクニ同士や海外との交流を裏付ける、千曲川流域の金属器とはやはり異なる内容に思えます。これまでの『大きな財力や権力をもつ有力者または集団・組織の考古学的な検証はできない』今回の結論です。ただし、今後の調査等で今後変更される可能性があることを付け加えます。

### ■おわりに

平林氏の提示はじめ最近の調査からは、弥生時代の信濃は北九州から日本海経由の交流が道具(銅剣)で検証できそうに思えます。さらに鹿を刻んだ銅剣と土器とで、千曲川の集落と安曇・大町が関係付けられる可能性が出てきた。弥生時代の安曇開拓と安曇族を結びつける論拠の一つになるのではと、ロマンあふれる歴史の解明が現実味を増すように受取れそうな現況です。

その中で弥生時代の安曇について私なりに考えてみましたが、会報6における本郷敏行さんの『今、安曇族という呼称を使うことへの疑問』を読ませていただき、拝聴すべき提起だと強く感じていますので、最後にこの点について触れます。

私たちの故郷『安曇』はいつ如何なる経緯のもとに誕生し現在に至ったかを、会員各自の考え方や方法で追究していくのがこの会の基本的考え方でありましょう。そうしたとき、現在の状況を受け安曇の歴史を研究する中で『安住の地に来訪した安曇族があり』『時期は弥生時代』と結論付けて、一つの方向に合致する情報成果を採り都合の悪い内容は除外して全体の研究を進めるのではと老婆心ながら心配しています。どのような方法であれ歴史学として研究を進める立場からは、本郷さんの指摘はきちんと噛み締めてみる必要を感じます。

一つ一つ証拠となる資料を探して追究する道は地味で根気が必要であり、どうしても筋書きに合う方策で一気に結論付ける誘惑に駆られるのは私も同様です。が、まずは自分たちが住み研究の対象とする安曇について、一つ一つ実証的客観的に論証していこうと戒めています。その先に『安曇の先人の足跡が見える』と確信しています。それが学問としての歴史に近づくことでしょう。

# 龍伝説—川會神社バージョン

氏族部会 平林 厚美

龍伝説は長野県内の各地に残っています。安曇野・松本にも『犀龍と小太郎』の伝説があり、言い伝えの地が数多くあります。2012年1月1日付タウン情報で『龍を訪ねて』という記事の中に、長野市の童話作家、和田登さんが龍伝説について説明をしています。それは、上田地方の塩田平と松本・安曇野地方で話が分断されていた。すなわち、上田では、小太郎は塩田平で生まれ成長したが完結がはっきりせず、一方松本・安曇野には、小太郎の偉業の話が残っていて、それらを一つの話と推測し『龍の小太郎』にした、というものです。

皆さんはこれまで犀龍物語は主として1724年松本藩で編集、公刊された「信府統記」の中でご存じの方も多と思います。ここからは、池田町会染十日市場にある川會神社の氏子の手元に残されていた古文書に記されている『犀龍物語』の幕開けです。脚本は常盤村治氏、現代語訳及び注は「信濃安曇族のルーツを求めて」の著者坂本博氏によるもので最も古い犀龍物語といわれます。

## 信濃国の川會神社の御祝詞ならびに縁起

豊葦原の中つ国は平和で、天の神の定めどおりに定まりて、今の天皇の御代十二代まで私は犀龍の姿でこの江湖に住んでいました。ここに固い土地が生まれるならば、人家も現れるに違いありません。私こと犀龍に属する太い犀龍がおはします。以て彼に乗りて、障碍をなす岩を破りて、水を通すならば、剛堅の地に村里が出来て、増える人も多くなり、それは草木が栄え茂るようでありましょう。その栄え茂るが事のように、汝もまた常に民草の擁護を寄託されるでしょうが、このように言い聞かされても従わない荒ぶる邪鬼どもを嘔み、追い払えば、水は速川のように、またそこに座す瀬織津姫の話のようでもありましょう。

信濃国有明の里は垂仁天皇の御代(第十一代、BC69～AD 71)までなお湖水であり、民の住居はなかった。十二代の天皇である景行天皇の御代、此の湖水に白毛の犀が住んでいた。

(注)信府統記では小太郎の父が白龍王となっている。では、母犀は青龍だったのか？むしろこの縁起のほうが筋が通る。母犀の色が白、父犀の色が蒼のほうが自然な感じだからである。

また、高梨(今の須坂市)の深い淵に蒼龍が住んでいて、二匹の犀龍は戯れに動き、絡まり交わりて、子供を一人産んだ。八歳に生長したとき、この子を和泉真郎と名づけた。あるとき真郎は母の犀を慕い求めて、尾納澤にて出会った。

(注)尾納澤(小野沢)という川は東筑摩郡朝日村をながれ

ているが、途中で鎖川と名を変え、松本市笹賀で奈良井川に合流する。なお、信府統記では、和泉小太郎は熊倉下田の「尾入沢」で母犀に巡り会ったことになっている。熊倉は豊科の高家にあるが、下田は松本市島内にあり、田沢と平瀬の間の地点である。また、高瀬川上流にあって、大町ダムの手前でこの河に流れ込む川に「尾入沢」がある。

母は真郎に述べて言うには、「吾なる犀龍に(夫として)属する太き犀龍おはします。お前はこれに乗って邪魔な岩を破り、水を通すなら、

(注)文脈からして、真郎は父の犀に乗ったのである。これがまた信府統記と違うところである。

固い地面の上に家を作ることが出来るので、人々が多く増え、この地はますます繁栄するでありましょう。父母は底津彦、底津姫である。知り合ったことによって、神はまた潜在している。

(注)川會神社の祭神は底津綿津見神である。ここに底津彦、底津姫が出てくるのは大変興味深い。

真郎、母の教訓に従って、尾納澤より父の犀龍に乗り始めて幾重にも重なる険難なる岩礫をば粉々に破り、こうしてこの川は遙か東の川會で、川會に住む犀龍が破った川と合流して一つに流れるようになった。

これより陸地が出来て、これを有明里と言った。川會に館を治め営むうちに、一人の子供が生まれた。これを名づけて、和泉太郎と申す。真郎殿は年齢百歳にして神として天に昇りしなり。川會明神と應現おはすはこの御神なり。

(注)川會神社の祭神は和泉真郎であるという。底津綿津見ではないそうだ。なお、明神とは神仏混淆の呼称である。

成務天皇(第十三代、即位は131年、退位は190年)の御世の三月十日に海野の村より往来する男女は此の場所のために悩み苦しむ。

和泉太郎殿は弓矢を取りて、之を窺う。険しい山の霧の中に潜みて、その姿を明らかにせず。即ち、西南を望む小さな嶺に上りて、一心に天照御神を祈るとき、大きな宝鏡が梢に架かり、その光輝は明々として、周囲全面を照らし出した。

(注)西南とは伊勢神宮の方角であろう。険しい山とは有明山や北アルプスなどであろう。天照大神が出てくるころから、之は安曇族伝承ではなく、むしろ荷科氏時代のものであろうか。仁科神明宮の影響が大きいようだ。

妖鬼は身を隠すところ無く、姿を現して、逃亡せんと欲する。和泉太郎殿は神徳靈威に乗りて(助けられて)、速やかに(どんと)之を射殺す。これより良民は永く安心



っている。このように青龍、朱雀、白虎、玄武の四神にふさわしい配置をなして川會神社はある。

そういうわけで他の神社に比べても重きをなし昔のように繁栄している。村は平穏な楽園となり豊かで、中国の蓬萊、境のような理想郷になること疑いようがない。このように四神に守られた要害の地で神慮にかなっている川會神社は貴重で、昔のように繁盛するので確信して崇敬すべきである。

氏子の内山氏と相談して神社の記録をはっきりさせ縁起を記録に残して奉納するものである。というわけで禿毫(とくごう)すなわち拙文浅学の身だるものの記述した次第である。後世の人が補筆してくれば本望である。

敬白

坂本博氏は、「信濃安曇族のルーツを求めて」の中で、『川會の縁起』で語られている犀竜物語は、信濃安曇族が水路を整備して、足下の湿地や沼地の排水をおこない、これを農地に変え、新しい村を作った史実を反映していると読み解くことができる。それは「安曇平開拓史」の一コマであると述べている。さらに同著の中で当時の川會神社の場所について、この神社はかつては川の西側、つまり有明の里にあったことが知られているため、現在の乳房川は川会で高瀬川に合流していないが、古代では合流していたと考えられるとしている。当時の合流の様子とその地点にあるもう一つの神社マークを地図で確認していただきたい。(図2参照)

私にはもう一か所とても気になる遺跡がある。それは菅ノ沢遺跡である。長野県埋蔵文化財センターの報告書、『国営アルプスあづみの公園 埋蔵文化財発掘調査報告書3』(2004.12)中で、製鉄関連遺物が発見され鉄の成分分析結果を紹介している。低チタン砂鉄(乳川の砂鉄と同じ特徴)を原料とした精錬滓や流失滓などの精錬滓など多く出土しているの、製鉄から製品製造までの作業が行われていた。それは11世紀ごろで、鉄生産に深く関わりをもつ集団が居住した集落である可能性が極めて高くなったと説明している。しかしもっと広範囲での調査が望まれる。(図1参照)



高瀬溪谷緑地公園のモニュメント



大町ダムの龍神湖から南島を望む

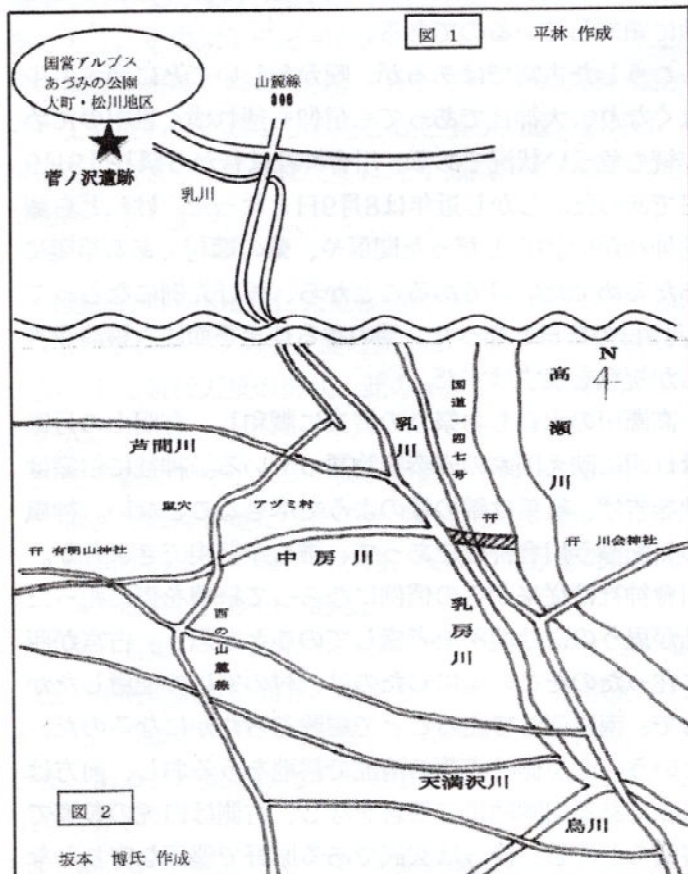
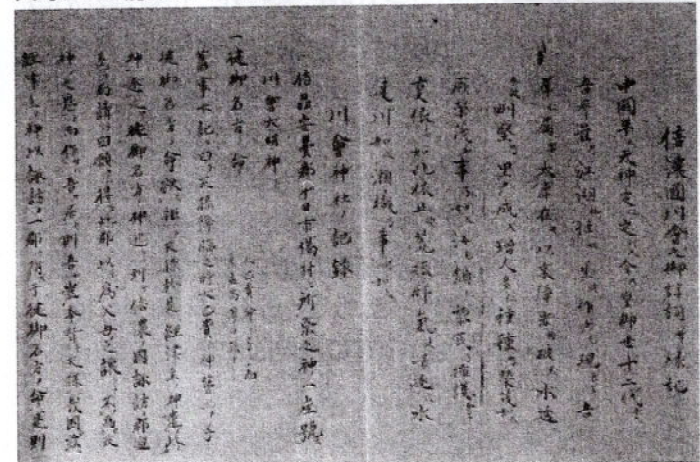


図1 平林 作成



川會神社の縁起と記録

っている。このように青龍、朱雀、白虎、玄武の四神にふさわしい配置をなして川會神社はある。

そういうわけで他の神社に比べても重きをなし昔のように繁栄している。村は平穏な楽園となり豊かで、中国の蓬萊、境のような理想郷になること疑いようがない。このように四神に守られた要害の地で神慮にかなっている川會神社は貴重で、昔のように繁盛するので確信して崇敬すべきである。

氏子の内山氏と相談して神社の記録をはっきりさせ縁起を記録に残して奉納するものである。というわけで禿毫(とくごう)すなわち拙文浅学の身だるものの記述した次第である。後世の人が補筆してくれば本望である。

敬白

坂本博氏は、「信濃安曇族のルーツを求めて」の中で、『川會の縁起』で語られている犀竜物語は、信濃安曇族が水路を整備して、足下の湿地や沼地の排水をおこない、これを農地に変え、新しい村を作った史実を反映していると読み解くことができる。それは「安曇平開拓史」の一場面であると述べている。さらに同著の中で当時の川會神社の場所について、この神社はかつては川の西側、つまり有明の里にあったことが知られているため、現在の乳房川は川会で高瀬川に合流していないが、古代では合流していたと考えられるとしている。当時の合流の様子とその地点にあるもう一つの神社マークを地図で確認していただきたい。(図2参照)

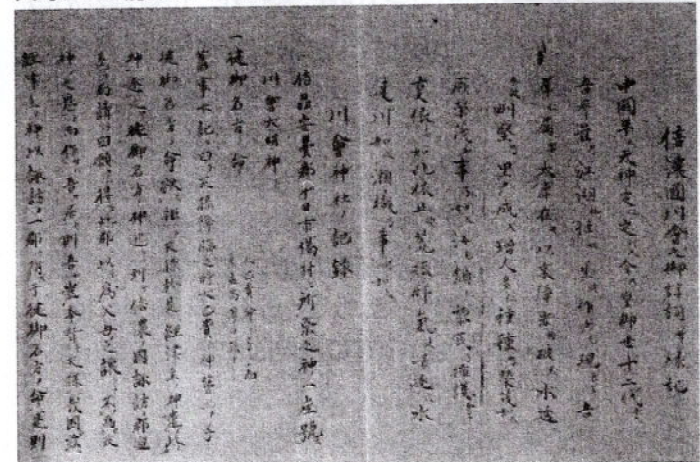
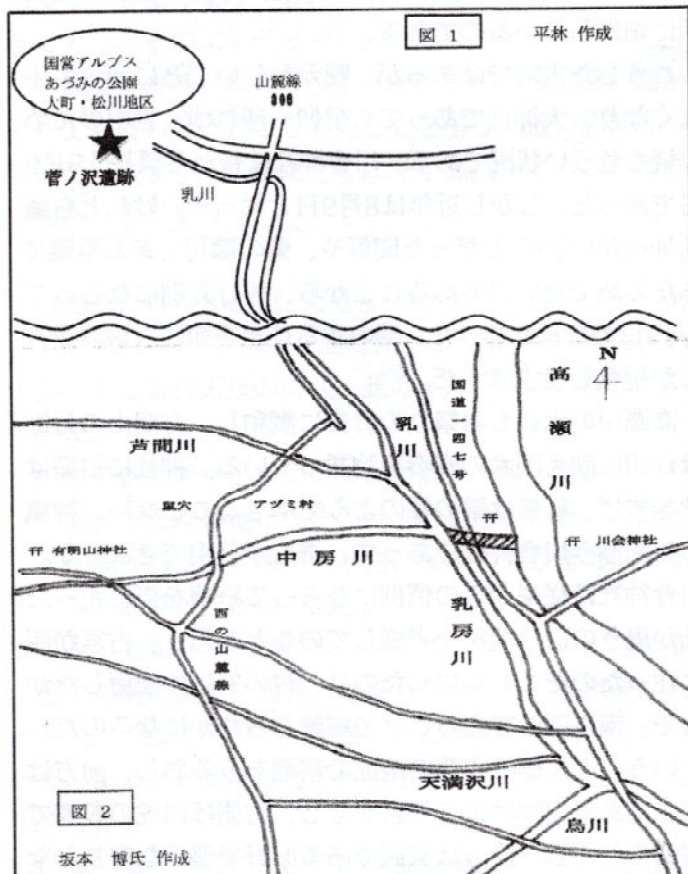
私にはもう一か所とても気になる遺跡がある。それは菅ノ沢遺跡である。長野県埋蔵文化財センターの報告書、『国営アルプスあづみの公園 埋蔵文化財発掘調査報告書3』(2004.12)中で、製鉄関連遺物が発見され鉄の成分分析結果を紹介している。低チタン砂鉄(乳川の砂鉄と同じ特徴)を原料とした精錬滓や流失滓などの精錬滓など多く出土しているの、製鉄から製品製造までの作業が行われていた。それは11世紀ごろで、鉄生産に深く関わりをもつ集団が居住した集落である可能性が極めて高くなったと説明している。しかしもっと広範囲での調査が望まれる。(図1参照)



高瀬渓谷緑地公園のモニュメント



大町ダム龍神湖から南島を望む



川會神社の縁起と記録

# 誌上ギャラリー

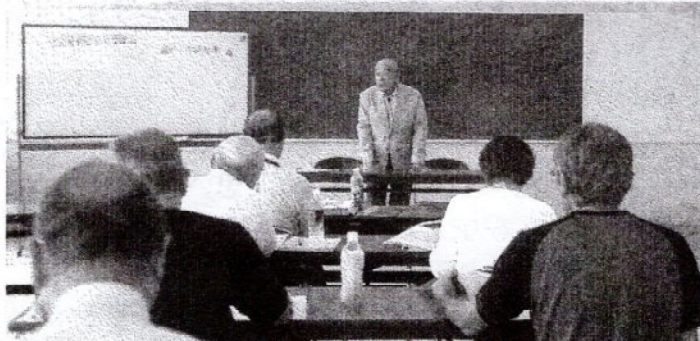
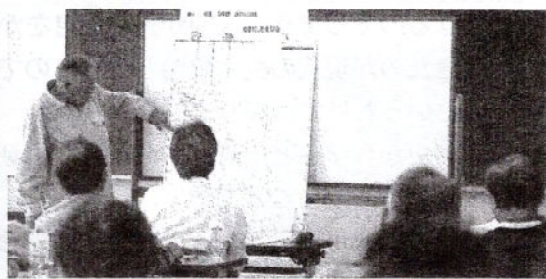
撮影：小松宏彰会員



古墳発掘見学会（国営アルプスあづみの公園）



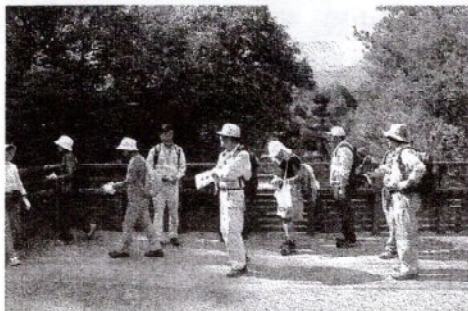
部会活動発表会



第2回部会合同学習会



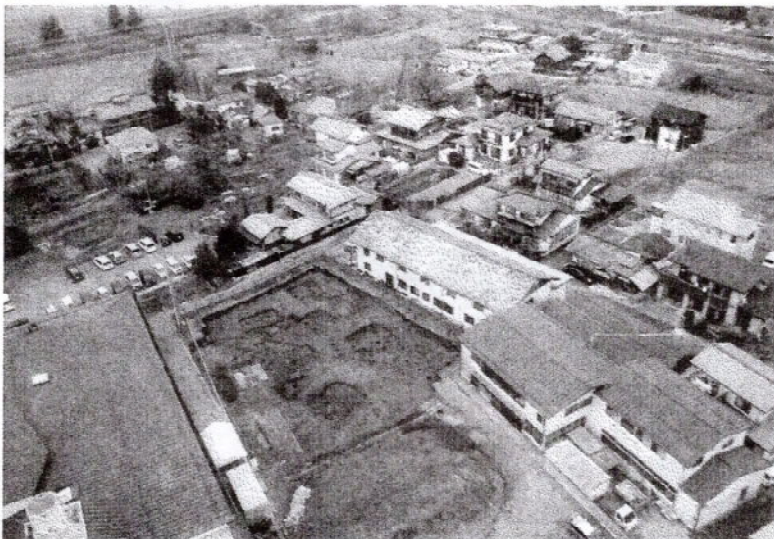
後援会：北村遺跡とその時代



安曇のフェスタでイベントガイド



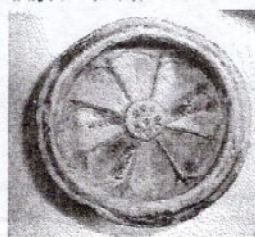
桜咲く穂高神社境内



明科総合支所発掘調査（明科）



秋祭り（三郷）



出土瓦（明科）



平安時代木棺墓出土土器（明科）

## 編集後記

## 歴史を正しく理解するということ

賢者は歴史から学ぶと申しますが…。歴史を検証するには、先入観や固定観念にとらわれない地道な取り組みが必要です。

月日の経つのは早いもので、今年も1ヶ月が過ぎてしまいました。毎年のことですが、今年こそはと思いながら、つい何もしない時間が続いてしまいます。今年も我が日本は多くの課題を抱えながらの出発となりました。

我が国の問題は私たち一人ひとりの問題でもあります。国民一人ひとりの意志と国家としての意志がどう結びつくか、大変難しいところですがこれが政治のしくみということになるのでしょうか。人間が長い年月をかけて作りあげてきたのが現代の民主政治というものでしょうが完全無欠というわけには参りません。

賢者は歴史から学ぶと申しますが歴史を検証することはいつの時代も必要なことです。

私たちの安曇誕生の探究も一族の歴史ではなく日本の古代史の中で巾広いつながりが見えてくるものと思います。

現実にも目を向けると昨年末に成立した特定秘密保護法があります。1月6日付の信濃毎日新聞「斜面」でもふれているイギリスの作家ジョージ・オーウェルの小説「1984年」を思い出すにはいられません(斜面は生意気盛りの高校生時代その論旨に嘯みつき時の副社長本多助太郎さんから丁寧なお諭しのご返事をいただいたことを鮮明に記憶しています。)この小説については過去に現代社会の様々な課題に対比して識者の論証が行われています。小説の国のスローガンは「戦争は平和なり/自由は隷従なり/無知は力なり」というもので思想警察も登場します。今ここで小説の内容や評価、また法律の是非についてはその場ではありませんので触れませんが、私たちが歴史にどう対処すべきか考えなければならない事だけは確かです。そういう意味ではTPPの問題もあります。TPPの本質をメディアがどこまで国民に伝えているかはなはだ疑問であります。正式名称を訳せば「戦略的」という文言が入っています。周知の事実として使わないのか、意図的に避けているのかは判りませんが戦略的の意味は大変重要です。特定の国の包囲網を築くのか、あるいは日本を狙い打

ちにしているのかはともかく、これはブロック経済化といえるものだと思います。ブロック経済という極端な保護主義が第二次世界大戦の原因となったことは歴史が証明しています。TPPには、例外なき関税撤廃という目標もあります。自由貿易ともいうものでこれは世界経済の必然の流れです。ただここで考えるべきは「関税自主権」です。関税0は無理でしょうが、それぞれの国の条件は違います。気候風土等が同じならば関税はなくても良いでしょうが国情を無視した国力を背景とした強制は受入れられるべきではありません。

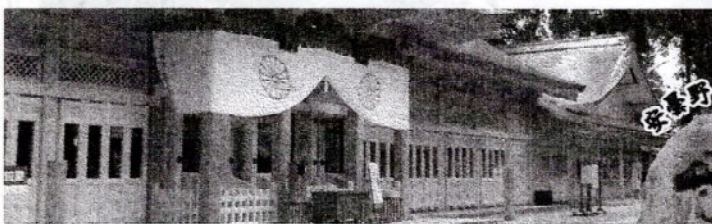
それともう一つ靖国参拝があります。近隣諸国が批判しておりますが私はこれは国内問題だと思っています。他国にいろいろ言われることではないのではないのでしょうか。明治天皇はすべての人を祀るという主旨で創ったといわれていますし、戦後宗教法人とされています。宗教であれば誰を祀っても良いはずです。

神道を宗教法人としたのはアメリカを中心とした日本の占領政策の一つです。日本の神道も仏教もさらにはギリシャ哲学も孔孟思想も根は一つだと思います。自然への畏敬、見えざる力への畏怖、人の生き方への、人の命の根源への探究はすべてに共通しています。

某国の大統領は歴史認識云々と言われますが見るべきは史実です。

私たちが戦前の皇国一元史観、戦後の唯物論的無定見史観では歴史を正しく理解することは出来ません。刑事事件では物的証拠、自白証拠、状況証拠が用いられるようですが歴史を学ぶ上でもあてはまると思います。

物的証拠とは勿論考古学の分野です。自白証拠は遺跡、地形、言語などでしょうか、状況証拠は文献史料等から行う推論です。これらが融合することによってより真相に近い歴史が浮び上がると思います。先入観や固定観念にとらわれない地道な取り組みが必要です。長い道のりですが会員の皆さんのみんなの力で一步一步進んで行くではありませんか。(本郷)



安曇之祖神 穂高神社

安曇野市穂高6079 電話 0263-82-2003 <http://www.hotakajinja.com>

穂高人形飾物と道祖神展

資料館 御船会館 電話 0263-82-7310



安曇誕生の系譜を探る会

会報発行：平成25年9月

事務局：〒399-8304 長野県安曇野市穂高柏原3612-3 事務局長 浅川 隆  
Tel.0263-82-4056 E-mail:asakawa.takasi@lapis.plala.or.jp